

# インフラストック効果の「見える化」の取り組みについて

宮崎県 県土整備部 技術企画課 主査 はらだ ひろゆき 原田 浩幸

## 1. はじめに

本県では、昨年も、  
・全国和牛能力共進会宮城大会で、「宮崎牛」が史上初となる3大会連続の内閣総理大臣賞受賞  
・杉丸太の生産量26年連続日本一  
・Jリーグキャンプ受入数日本一  
など、全国に誇れる明るい話題が多くありましたが、この偉業の陰には、関係者の熱意や地道な活動はもちろんのこと、「インフラのストック効果」もあることにどれほどの方が思いを巡らせてくれたのでしょうか。

また、インフラ整備を担うわれわれは、そこに「インフラのストック効果」もあるということをきちんと伝えることができたいのでしょうか。

本稿では、本県におけるインフラストック効果の「見える化」に係る取り組みをご紹介します。

## 2. ストック効果事例集

安全・安心で活力ある地域づくりを推進するためには、インフラの計画的かつ効率的な整備・活用やメンテナンス体制の構築を図るとともに、県民や企業等に対してそのストック効果を広く発信し、さらなる活用を促すことが重要です。

そして、こうした取り組みによって、「小さな

投資」が「大きな効果」を生み出し、社会全体の生産性向上にもつながるものと考えています。

このため、本県では、インフラの整備・活用状況およびストック効果を広く知ってもらうことを目的として、平成27年7月にストック効果事例集を作成・公表しました。

これまでに、第4版まで発行し、県民向けの講習会や高校・大学等での出前講座などでストック効果をPRする資料として活用しています（図-1）。

ここでは、主な事業のストック効果を3つご紹介します。

### (1) 道路事業のストック効果

「都城志布志道路」は、国際バルク戦略港湾に九州で唯一選定され、穀物飼料の供給基地となっている志布志港と牛・豚・鶏の市町村別産出額日本一を誇る都城市を結ぶ地域高規格道路で、国土交通省、鹿児島県と連携しながら重点的に整備を進めており、整備の進捗に伴い、近隣工業団地の企業立地が進むなどのストック効果が現れ始めています。

また、昨今の世界的な穀物消費量の増大による畜産経営への影響が懸念される中、都城ICを経由して高速道路ネットワークともつながる都城志布志道路が全線開通すれば、物流のさらなる効率化が図られ、本県の基幹産業である畜産業の経営

宮崎県におけるインフラのストック効果事例集 (vol.1)

### わたしたちの暮らしと地域経済を支えるインフラ

道路、河川、港湾などのインフラ整備によって、企業の進出や雇用の増加などの地域経済の活性化、医療の充実や防災力の強化などの生活環境の改善が図られます。

宮崎県におけるインフラのストック効果の事例を紹介します。



平成27年3月21日に東九州自動車道 佐伯～高江が開通。大分～宮崎が一本の高速道路でつながる。

平成27年7月  
宮崎県 県土整備部

日本のひなた宮崎県

宮崎県におけるインフラのストック効果事例集 (vol.2)

### わたしたちの暮らしと地域経済を支えるインフラ

これからの社会資本整備は、限られた予算を最も効果的に活用するため、「賢く投資・賢く使う」インフラマネジメント戦略への転換が必要になっております。

本県では、高速道路等の整備を見据えた民間の設備投資や新たな工業団地整備など、地域経済の活性化に向けた様々な取組が始まっており、その事例を中心に紹介します。



平成27年8月に16万トンのクルーズ船「クワンタム・オブ・ザ・シーズ」が油津港に入港。インフラを「賢く使う」ことにより、大型クルーズ船の寄港が可能になった。

平成28年2月  
宮崎県 県土整備部

日本のひなた宮崎県

宮崎県におけるインフラのストック効果事例集 (vol.3)

### わたしたちの暮らしと地域経済を支えるインフラ

人口減少、少子高齢化が進む中、インフラ整備は限られた予算を最も効果的に活用することが重要です。

本県では、宮崎が有する高いポテンシャルを活かしながら、「賢く投資・賢く使う」インフラマネジメントを強く推進するとともに、そのストック効果を全国に広く発信し、地域の活性化に繋げ「暮らしの豊かさ日本一の宮崎」を実現します！この事例集は、このような本県の取組を紹介します。



油津港に寄港する大型クルーズ船

平成29年1月  
宮崎県 県土整備部

日本のひなた宮崎県

宮崎県におけるインフラのストック効果事例集 (vol.4)

### わたしたちの暮らしと地域経済を支えるインフラ

本格的な人口減少社会を迎えている今、「小さな投資」で「できるだけ大きな効果」を生み出し、社会全体の生産性向上や安全・安心の確保につながるインフラの整備・活用がこれまで以上に重要となっています。

本県では、ストック効果の高いインフラの整備・活用、国土強靱化に向けた防災・減災対策を重点的に推進し、「暮らしの豊かさ日本一の宮崎」を実現します！この事例集は、このような本県の取組を紹介します。



平成30年1月  
宮崎県 県土整備部

日本のひなた宮崎県

図-1 ストック効果事例集

リスクの低減にもつながることが期待されていません（図-2）。

## (2) 港湾事業のストック効果

県南部に位置する油津港では、増大するアジアのクルーズ需要を取り込み、インバウンドの拡大を図るため、既存施設を最大限活用しつつ、着脱式防舷材および係船柱の整備を進め、平成27年に16万トン級の大型クルーズ船の入港も可能となったところであり、平成28、29年はいずれも過去最多となる22隻、26隻のクルーズ船が入港

しました。

クルーズ旅客の増加に伴い、市民意識にも変化が生じており、油津商店街への新規出店や各種交流イベントの開催、地元高校生が英語での観光案内を買って出るなど、地域に活気が生まれてきています。

また、世界最大（22万トン級）のクルーズ船受け入れに向けた整備も完了し、今後、寄港が実現すれば、さらなる地域活性化に寄与するものと期待されています（図-3）。

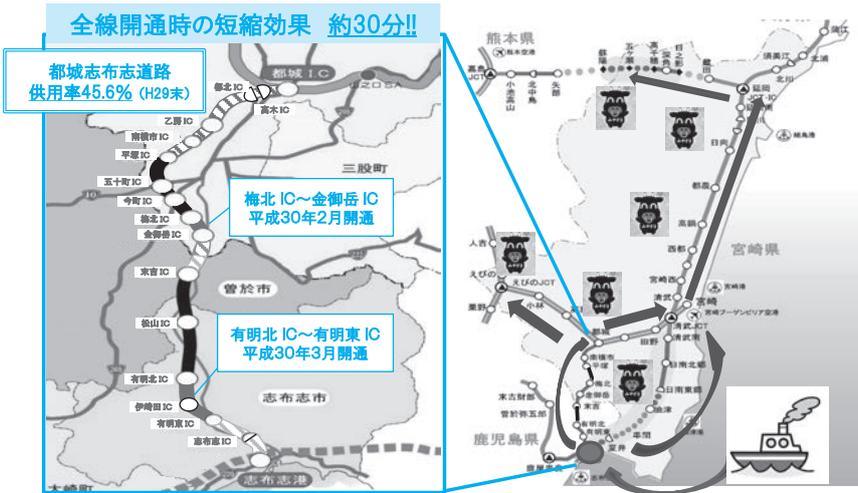
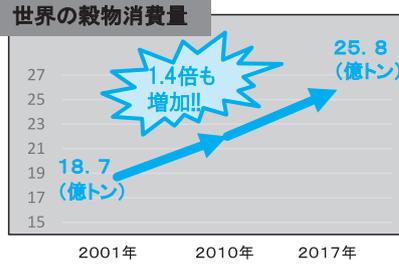


図-2 道路整備による輸送効率化

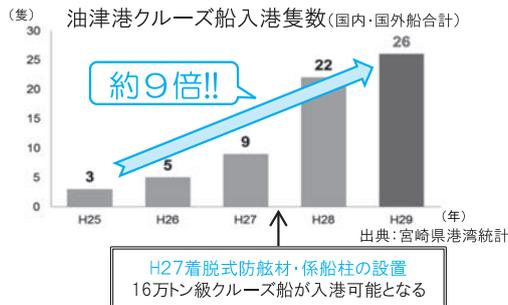
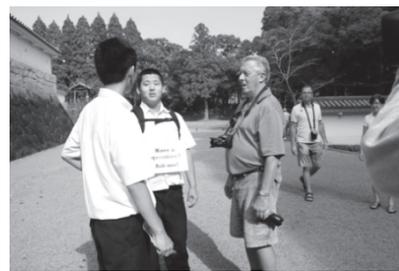


図-3 港湾整備による地域活性化

### (3) 河川事業のストック効果

県北部を流れる2級河川耳川では、平成17年台風14号の豪雨により、流域の多くの地区で浸水被害が発生しました。

このうち、河口部に位置する立縫地区は、神武天皇の船出の地（日本海軍発祥の地）として広く知られ、全盛をきわめた江戸時代～明治時代の面影が残る町並みが重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定されていることから、単に治水安全度を向上させるだけでなく、既存の石積み再現や旧船渡場の位置の明示など、産学官連携による歴史的景観への配慮や遺構の保持を行いました。

この結果、魅力ある水辺空間が創出され、観光客が増加するなど賑わいをみせています(図-4)。

### 3. ストック効果体感ツアー

本県では、ストック効果事例集等による情報発信に加え、『インフラ整備のストック効果を肌で感じてもらい、県民自身にも情報発信源になっていただきたい』との思いから、「ストック効果体感ツアー」を実施しています。

これまで、西米良村や諸塚村といった山間地において、道路整備に伴う交流人口の増加によって地域産業が活性化している様子などを体感してもらったほか、県内各地に残存する土木遺産の見学などを通じてインフラが長年にわたり担ってきた役割等も学んでもらっています。

また、昨年10月には、油津港に寄港した16万トン級の大型クルーズ船に乗船し、スケールの大きさを体感するとともに、港湾施設や周辺道路の整備状況などを見学してもらいました(図-5)。



■既設護岸の前面に新設嵩上げ護岸（日本海軍発祥地前）



図-4 河川事業による魅力ある水辺の創出



図ー5 地元情報誌とタイアップしたストック効果体感ツアー

参加者からは、「参加して初めて、道路や港湾の整備によって地域が活気付いている様子が実感できた」などの感想をいただき、このような「初めて」の機会をより多くの方々に提供できるよう取り組みを継続していく必要があると感じたところです。

このほか、小学生や高校生などを対象とした現場見学会も積極的に実施しており、インフラが果たす重要な社会的役割等を知ってもらい、ひいては将来の担い手となってもらえるようPRに努めています。

#### 4. おわりに

本格的な人口減少社会を迎えている今、国・県ともに厳しい財政状況が続いており、これまで以

上にストック効果の高いインフラの整備・活用が求められています。

加えて、整備したインフラのストック効果を最大化するためには、県民や企業等との情報・認識の共有が不可欠であり、一方通行の情報発信を改め、双方向に情報を生かせる関係を目指していく必要があります。

このような中、SNS等の普及により、情報を発信・収集するツールは多様化してきており、発信した情報がどれほどの人の目に触れたかなども容易に把握できるようになってきています。

引き続き、受け手側のニーズや課題を把握しつつ、効果的に情報を「見える化」できるよう、さまざまな取り組みを実施していきたいと考えています。